

【推薦・AO 編】英語外部検定 利用大学が 3 年連続の増加！

文系・理系学科問わず英語力の優遇広がる

旺文社 教育情報センター 29 年 10 月 16 日

大学入試における英語 4 技能の測定のため「英語外部検定」（以下「外部検定」）の利用が活発化してきている。現在のセンター試験の後継となる大学入学共通テストでも、英語試験の代わりとして外部検定の活用が決定するなど目が離せない状況となっている。

推薦・AO における外部検定としては、以前から英検が広く利用されてきたが、近年では TOEFL、TOEIC などその他の外部検定も数多く利用されている。今回は【推薦・AO 編】として、今年度（平成 30 年度）入試での外部検定の利用動向を過去の調査結果と比較しながらお伝えする。

●今年度から外部検定を推薦・AO に取り入れた主な大学

国立大

宮城教育大<教育>、埼玉大<経済、工>、豊橋技術科学大<工>、香川大<創造工>

公立大

長野県立大<グローバルマネジメント、健康発達>、県立広島大<人間文化>、福岡県立大<看護>

私立大

札幌保健医療大<保健医療>、北海道科学大<全学部>、関東学園大<経済>、埼玉医科大<全学部>、三育学院大<看護>、成城大<文芸、経済>、聖心女子大<文>、多摩美術大<美術>、東京女子大<現代教養>、東京理科大<経営、工、理工、薬>、東洋英和女学院大<全学部>、福井工業大<全学部>、桜花学園大<保育>、南山大<外国語>、日本福祉大<社会福祉、経済、健康科学、子ども発達、国際福祉開発、看護>、鈴鹿大<全学部>、佛教大<文、教育>、桃山学院教育大<教育>、神戸女学院大<文>、神戸親和女子大<全学部>、園田学園女子大<人間健康>、倉敷芸術科学大<全学部>、美作大<生活科学>、徳島文理大<文、理工、薬、香川薬>など。

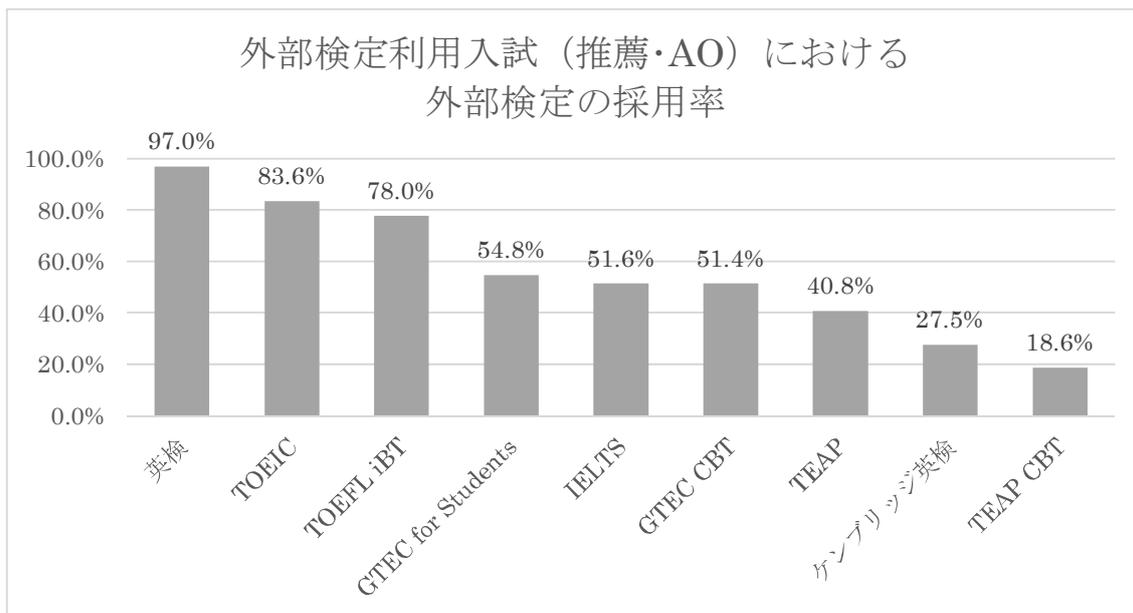
※一部の学科で実施していない場合もあり。詳細は要項を参照。

30 年度入試では 762 大学中 335 大学※、全体の 44%が推薦・AO で外部検定を利用した。設置者別に見ると国立 38 大学（34）、公立 24 大学（21）、私立 273 大学（259）（かっこ内は昨年度数）となっており、いずれにおいても昨年度の数字から増加し、本調査を開始した 28 年度から 3 年連続の増加となった。

※文部科学省所轄外の大学校を含む。通信制のみの大学を除く。

先日、文部科学省から「大学入学共通テスト実施方針」とともに発表された「平成33年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係わる予告」では、新たな推薦・AOのルールとして「学力不問」の入試方式を改善し「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」を適切に測ることとされた。その評価方法のひとつとして高校時代に取得した資格・検定があげられたことは、今後の推薦・AOにおいて外部検定の利用拡大の後押しとなるだろう。推薦・AOと一般入試の両方から入試改革がはじまりつつある今、各大学の今後の動向に注目だ。

●今年度も採用率を大きく伸ばした「TEAP」、英検をスコア化した「英検 GSE」の導入開始



※各大学にて外部検定を利用している入試方式を100とし、それぞれの検定が採用されている割合を算出。
 ※原則、学科単位で集計。1つの学科で複数の入試方式がある場合、外部検定の利用内容が同じなら「1」、異なるなら別々に計上。
 ※各検定の採用については募集要項に記載されている検定をすべて計上。「それに準ずる検定でも利用可」のような記載の場合は、上記すべての検定が採用されているとしてカウント。募集要項の文面から記載検定以外が有効と読み取れない場合には採用としていない。

こちらのグラフは30年度の推薦・AOで外部検定を利用する入試での各外部検定の採用率を表したものだ。上記の外部検定は、27年に文部科学省にて開催された「英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会」での配布資料に掲載されたことで知名度が飛躍的に向上した。昨年度に引き続いて今年度もいずれの外部検定も採用率が向上する結果となった。

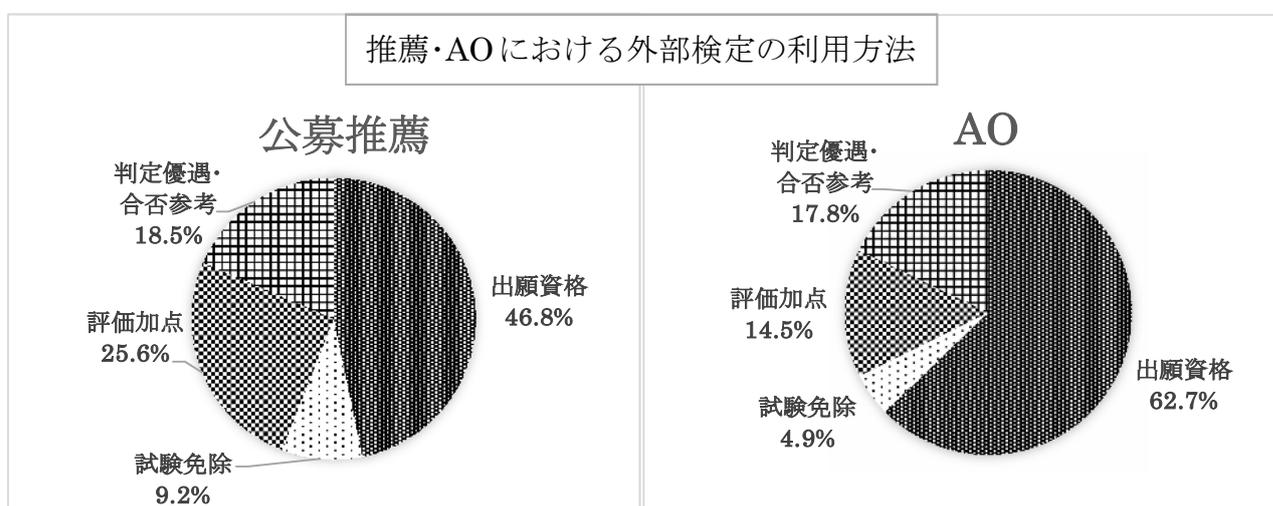
不動の採用率トップを誇るのが「英検」だ。これは英検の出題内容と、文部科学省が大学入学者選抜における英語力測定に求める「学習指導要領に沿った出題内容」が合致していることが理由としてあげられる。また今年度より英検3級以上を「聞く・話す・読む・書く」の4技能測定にリニューアルしたことも大学入試での利用に適したものになっている。

2年連続でもっとも採用率を伸ばしたのが「TEAP」だ。試験が実施されはじめて4年目を迎えるTEAPは、英語教員や大学入試に係わる人であれば一度は耳にしたことがあるほど大学入試において存在感を高めてきている。大学での採用率の向上とともに受験者数も急増しており、英検協会では試験日の追加設定で対応している。

TEAP に続いて採用率を伸ばしたのが「IELTS」。海外大学への留学の際に広く利用されている信頼性から日本の大学入試でも徐々に浸透してきている。現在、多くの外部検定では Speaking テストを PC を使った録音式で行っているが、IELTS では試験官と 1 対 1 の対面式で行われている。PC に向かう録音式と試験官との対面式、これは受験生の好みが分かるところだろう（上記の外部検定の中で 1 対 1 の対面式で Speaking テストを実施しているのは IELTS と英検）。

試験結果を合否で表していた英検は「英検 CSE」と呼ばれるスコア制度を導入した。今までは大学が英検を入試優遇に利用する際、「準 1 級ではレベルが高すぎ、2 級では低すぎ」といったことが起こっていた。この英検 CSE スコアを利用することで、大学は受験生に求める英語レベルを細かく設定できるようになった。今年度は 11 大学がこの英検 CSE を推薦・AO に利用した。英検 CSE は今後、大学入試で大きく広がっていくだろう。

●公募推薦、AO とも利用方法は「出願資格」が最多。利用傾向は昨年度と大きく変わらず



※それぞれの入試で外部検定を利用している大学（公募推薦=249 大学、AO=180 大学）の中での割合。

※各項目の例【出願資格】「英検 2 級以上を出願資格とする」等。

【試験免除】推薦・AO に学力検査などを課す大学で「英検準 1 級以上の者は英語の学力検査を免除する」、「英検準 2 級を 80 点、2 級を 90 点、準 1 級を 100 点に換算して英語の学力検査を免除する」等。

【評価加点】「英検 2 級以上の者は点数化し評価に加点する」等。

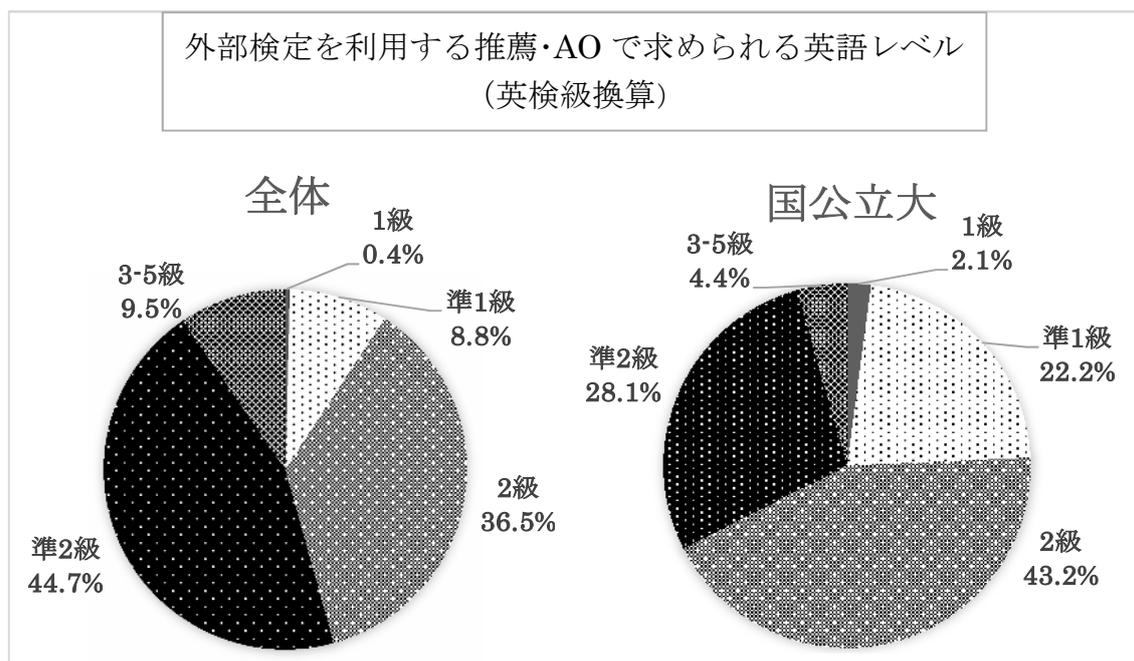
【判定優遇・合否参考】「英検 2 級以上の者は合否判定の際に参考とする」等。

「公募推薦」と「AO」それぞれで外部検定の利用方法の内訳を表したのがこのグラフだ。昨年度と比較してみても各利用方法で若干割合の変動こそあれ、大きな変化は見られない。

公募推薦では出願に際し評定平均値を課すことで学力を担保し、より高い英語力を持つ受験生に「評価加点」するため外部検定を利用することが多い。対して AO では評定平均値を課さず、外部検定を利用した「出願資格」を設定して受験生の最低限の学力を担保することが多い。

推薦・AO での外部検定利用は一般入試と比較して歴史が長い。そのため、外部検定の利用方法にも大きな変化が見られないのだろう。

●国公立大では中級レベル（英検 2 級レベル）の利用が拡大



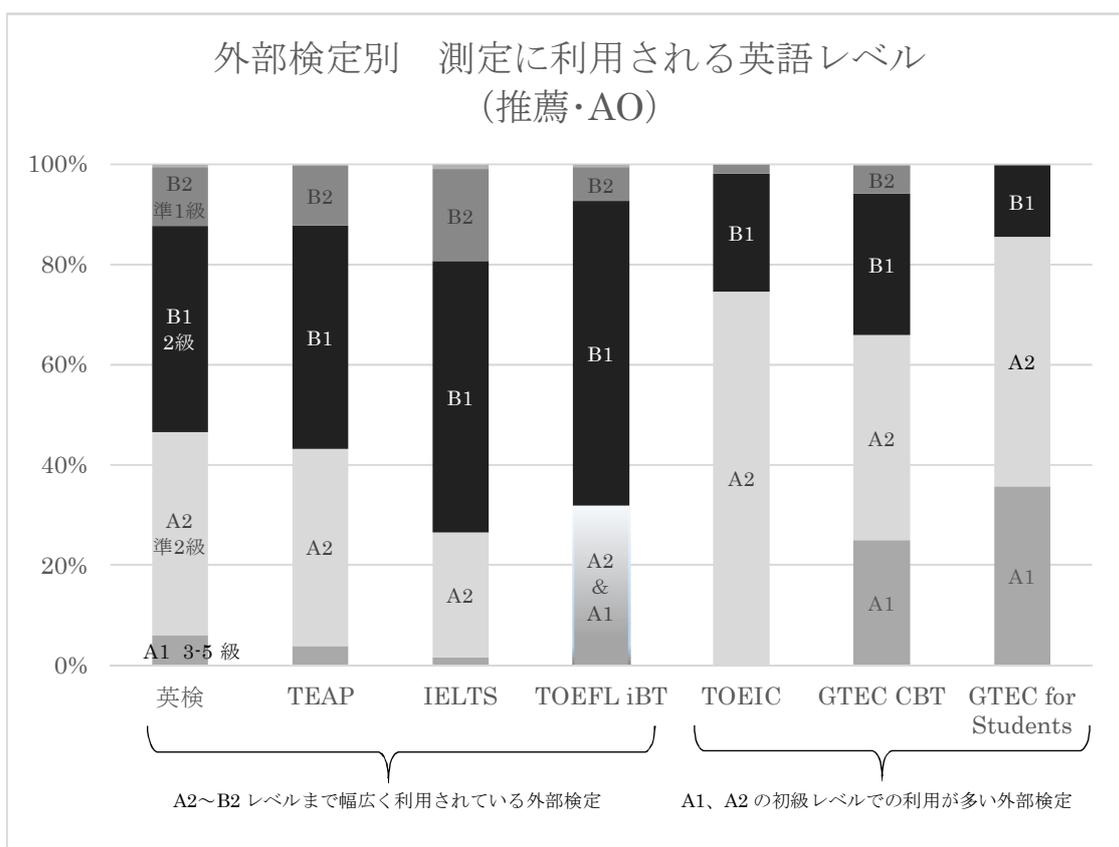
※外部検定の級・スコアが段階的に利用される場合、もっともやさしいレベルのみを集計。

ここでは外部検定を利用する推薦・AO で求められる英語レベルを見てみよう。外部検定の利用方法には「出願資格」「評価加点」など、さまざまなものがあるが、ここではそれぞれの利用方法で求められる英語レベルを集計し合算している。また、利用されている外部検定も多様だが、これらをすべて文部科学省発表の CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠＝言語の運用能力レベルを示す標準規格）の対照表を使用して英検級への換算を行った。

国公立大全体での割合を見てみると、昨年度と比較して準 2 級レベルが 4.9 ポイント減少、2 級レベルが 3.2 ポイント増加しているが、両者で全体の 8 割を超える結果は昨年度と変わらない。文部科学省は高校卒業時の目標英語力として英検準 2～2 級レベルを掲げており、多くの大学がこのレベルを優遇対象としていることがよくわかる。

国公立大に絞って注目してみると、昨年度は上位レベル（英検準 1 級レベル）の優遇が 3 割にのぼり、比較的上位層に対する優遇が目立ったが、今年度は 2 級レベルが 43.7%（昨年度 31.6%）と増加している。これは茨城大と筑波大で外部検定の利用が拡大されたことが大きく影響している。準 1 級レベルという、ずば抜けて高い英語力を持つ限られた受験生を手厚く優遇する形から、2 級レベルの受験生にも相応の優遇を行う方式が増えてきた。この点からも外部検定利用入試が多くの受験生にとって身近な入試になってきたといえるだろう。

●主に推薦・AO で求められる A2～B1 レベル。「英検」「TEAP」「IELTS」がバランスよく測定



※外部検定の級・スコアが段階的に利用される場合、もっともやさしいレベルのみを集計。

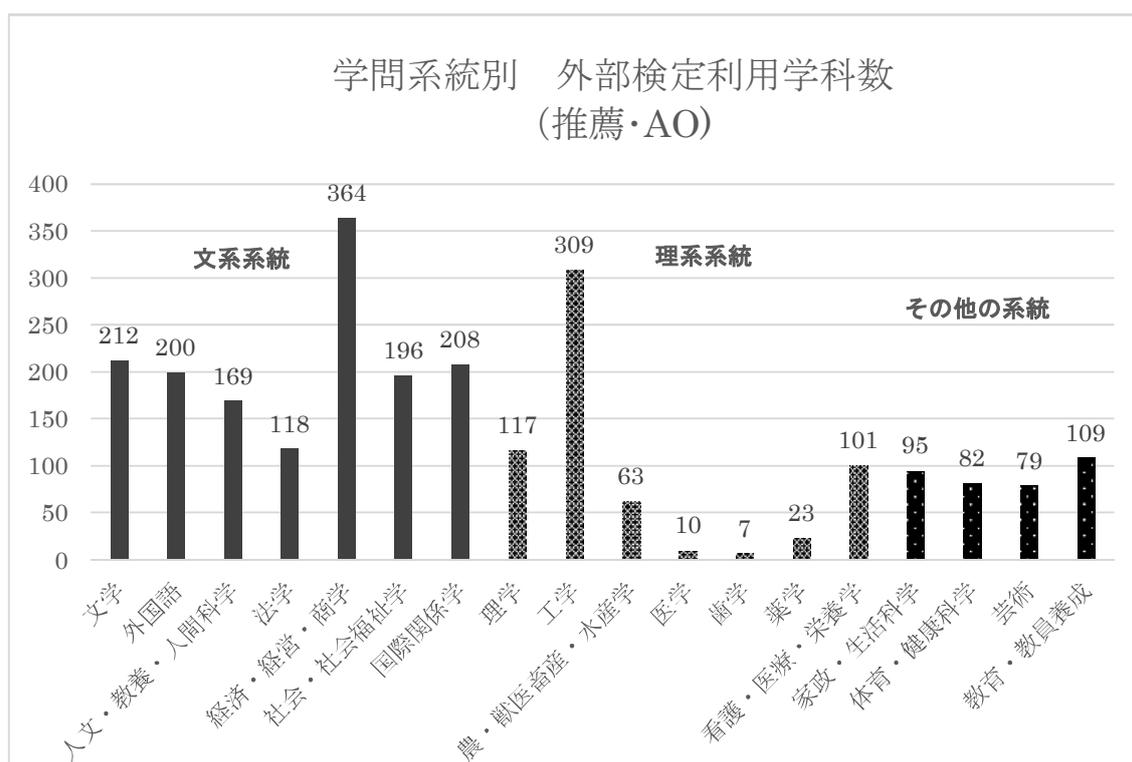
ここでは各外部検定がどの英語レベルの測定に多く用いられているかに注目する。利用される外部検定のレベル統一には、前出の文部科学省発表の CEFR 対照表を使用した。

入試に利用される外部検定にはさまざまあるが、各外部検定が測定を得意とするレベルは異なっている。1つの試験問題で初級から上級の幅広い英語レベルを詳細に測定することは非常にむずかしい。そのため外部検定は主に測定の対象となるレベルを絞り込んで制作されている。

推薦・AO で求められることの多い準2～2級レベル (CEFR A2～B1) の測定に多く用いられる外部検定を見てみよう。もっともバランスが取れているのが「英検」「TEAP」だ。英検は受験者のレベルに合わせて1～5級の7段階に分けて問題を制作している。準2～2級では高校中級～卒業程度の英語力測定を目的としているため大学入試に適切なレベルの英語力測定が可能だ。TEAP に関してはもともとが日本の大学入試での英語力測定を目的として A2～B1 レベルの受験生の選抜に照準を合わせて制作されている。

大学入学者選抜という目的で外部検定を利用する場合、多くの受験生が集中すると思われる A2～B1 レベルをいかに序列化するかが重要となる。大学は入試に外部検定を利用する際、学生に求める英語レベルに応じた外部検定を選択することがより良い入学者選抜に結びつくといえるだろう。

●学問系統別では文系、理系問わず、全ての系統で外部検定の利用が増加。



※学問系統は螢雪時代4月号臨時増刊における各大学からのアンケート回答に沿って分類。

※外部検定を入試利用している学科を計上、同一学科で複数の外部検定利用入試を実施する場合も「1」と計上。

※学問系統が複数にまたがる場合、両系統に計上（例：国際経営学→「経済・経営・商学」「国際関係学」系統の両方に計上）。

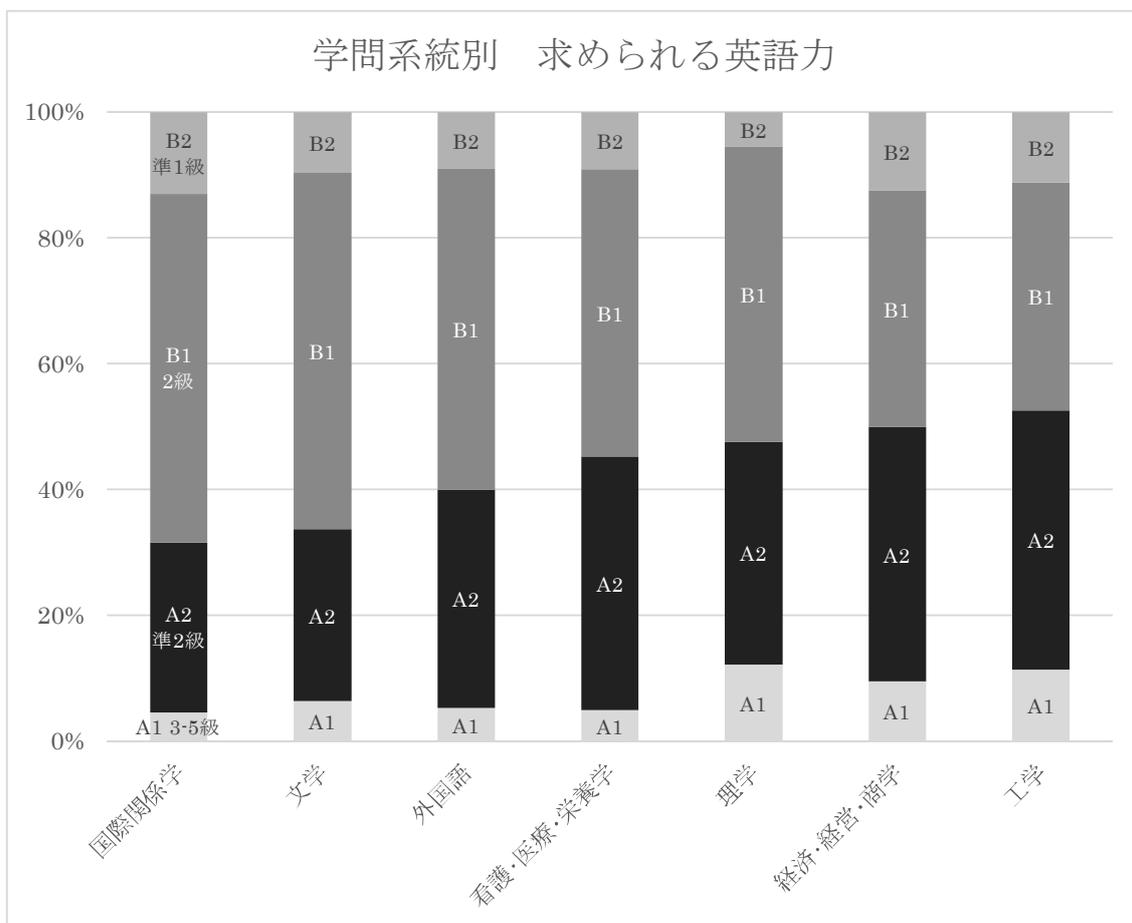
ここでは入試に外部検定を利用している学科を昨年度と同様に18の学問系統に分類、集計を行った。結果、すべての学問系統で利用が増加しており、各学問系統の外検利用の傾向に大きな変化は見られなかった。

昨年度と比較して今年度目立って増加した系統は以下となる。

「薬学」12→23 (192%)	「文学」181→212 (117%)
「看護・医療・栄養学」74→101 (137%)	「家政・生活科学」81→95 (117%)
「体育・健康科学」61→82 (134%)	「工学」268→309 (115%)
「芸術」61→79 (130%)	「理学」102→117 (115%)
「教育・教員養成」88→109 (124%)	「農・獣医畜産・水産学」57→63 (111%)

全体数としては文系系統での利用が多くなっているが、理系系統で突出した「工学」での利用数と、その他に分類される「看護・医療・栄養学」「体育・健康科学」系統の高い増加率には注目だ。文系、理系、その他の系統間には数の差こそあれ、すべての学問系統で外部検定利用が増えてきていることは大学入試における英語力の重要度を表していることに間違いはない。

●求められる英語力は学問系統間に差



※外部検定の級・スコアが段階的に利用される場合、もっともやさしいレベルのみを集計。

前出のグラフ「学問系統別 外部検定利用学科数」のうち、利用学科数の多かったいくつかの学問系統を抽出して求められる外部検定の英語レベルを調べた。

比較的高いレベル（2級）以上を求める割合が多く見られるのが「国際関係学」「文学」。対してやさしめのレベル（準2級）からの優遇を多く取り入れているのは「工学」「経済・経営・商学」「理学」という結果となった。

意外な結果となったのが「外国語」系統だ。高い英語レベルが求められるという予想に反し、比較的やさしめの準2級レベルから利用できる大学が多いことがわかった。これは語学系学科が幅広い難易度の私立大に設置されており、それに応じて外部検定もレベル設定されていることが影響していると考えられる。